

・いじめられっ子から悪ガキへ

戦争が始まった翌年の昭和十七年、わが家は大阪府泉北郡（現・堺市）福泉に移り住んだ。今となってはとても信じられないが、当時のその辺りは田畑の広がる田舎町で、よそ者を忌み嫌うところがあった。ましてや、戦時下の食糧事情厳しい所だけに、農家といえどもひもじい思いをしていたのはたしかで、よそ者は余計に嫌われた。

当然、子どもの世界にもそうした排他性は浸透していて、激しいいじめがあった。それでも、一年生の時には次兄が六年生で、あまりいじめられずにすんだものの、兄が卒業してしまうと事態は一変した。兄が眼を光らせていて我慢を強いられてきた、五年生以下の恨みが一気に私に押し寄せてきたのだ。

いじめはまるで日課のように、くる日もくる日も続いた。学校では、一応、先生の間もあるだけに、表立たいじめはなかったが、登下校時が修羅場となった。いかにいじめっ子たちと鉢合わせにならないように帰るか、そればかりを考えていた。

そんな日々を終止符が打たれたのは、終戦後、一年が経った頃。いつものように近所のいじめっ子が絡んできた。きっと、その日はどうかしていたのだろう。いつもだったら我慢してやり過ごすのだが、その時突如として感情が爆発した。勝てるとは思ひもしなかった。ただ、がむしゃらにかかっていた。相手に隙があったのか、思わぬ反撃にひるんだのか、**決着は意外なほど簡単**についた。周囲にいたいじめっ子たちも、私の激しい怒りに怖気づき誰も止めようとはしなかった。

その出来事を境目に私は大きく変貌した。何より「俺は強い」という自信がついた。きっと、態度も目つきも一変したのだろう。それまでいじめに加わっていた輩の誰ひとりとして突っかってこようとはしなかった。それどころか、廊下の向こうにいても慌てて逃げるか、愛想笑いを浮かべ挨拶してきた。それでも許せるほど、こちらの度量はなかった。それほどひどい仕打ちを受けていたということだ。

今度は下校時にこっちが追っかける番、同級生のいじめっ子らを次々とやっつけていった。やがて、六年生の番長と決着をつける時が来た。元々、体ががっしりとしていたのも幸いしたし、気持ちも強かった。二歳も年上の番長は**あっけなく白旗を揚げた**。以来、周囲に「コッテ牛」と怖れられ、やりたい放題。ただし、いじめだけはしなかったし、許さなかった。

中学生に上がると、悪童ぶりにさらに磨きがかかった。夏になれば、仲間を引き連れてスイカ畑に出かけ、せつせと収穫に汗を流す小父さんに、「二個もらうよ」と声をかける。これがそこいらの子どもだったら、追い払われてお終いなのだが、**こっちは名うての悪ガキ**。あとで畑を荒らされたのではたまらないとばかりに、「いいよ」と快諾してくれたものだった。

・小学校四年生で行商

本格的なアルバイトとして印象に残っているのが、小学校四年生の頃、化粧クリームが行商だ。まだ物資の不足していた時代に、これがずいぶん喜ばれた。行商といっても単に売り歩いただけではない。近所の小父さんに連れられて、問屋からクリームを一斗缶で仕入れ、それを容器に小分けして売り歩いたのだ。

始めの頃は真面目に目いっぱい詰め込んでいたのだが、それでは儲けは微々たるものにすぎない。そこで**画期的な詰め込み方法を編み出した**。クリームを半分くらい詰め込んで蓋をしたらひっくり返して持ち歩くのだ。売り歩くうちにクリームは蓋に寄り、開けると目いっぱい詰まっているように見えるという寸法だ。

これが思いの外、うまくいった。単純に売り上げは倍増、精も出た。まれに上げ底がバレて苦情を言われることもあったが、世間にはそんな商売が横行していた時代のこと、しかも貴重品ただけに、買う方もそんなものという意識があったのだろう、取り立てて問題にもならなかった。

・「デューク東郷」の由来

それにしても、学校をさぼってアルバイトに精を出す生徒をことさら注意する教師は皆無だった。悪童の親玉がいないほうがせいせいしていたのかも知れない。私も教師に無視され、好都合と居直っていた。

そんな私を咎めた先生が一人だけいた。あれは中学三年の中間試験でのことだった。授業中に先生の話すことなどろくに聞いていないのだから、さあ、試験だといわれても、ちんぷんかんぷん、答案用紙の解答欄を埋められるわけがない。試験中は決まって寝て過ごし、時間がき

たら白紙で投出するのが常だった。その日も、いつものように白紙で提出した。踵を返し席に戻ろうとした時だ。

「おい、斉藤。白紙は結構だが、君の責任の下に答案用紙を出すのだから名前だけは書きなさい」

と呼び止められた。試験を終えたばかりのクラスメイトは、緊張から解放され、ざわついていた。が、先生のその一声で一気に静まりかえった。皆、私が何を仕出かすのか固唾を飲んで見つめていた。先生が意見するなんて、**普段の私なら暴れて当然のシチュエーションだった。**

しかし、私にとっても先生に注意されるなんていうのは予想外の出来事で、頭に血が上るのも忘れ、冷静に先生の言葉を受け止めてしまったのだ。たしかに理のある意見だった。素直にそう思えたので、自らの非をあっさり認め、答案用紙を返してもらい、そこに名前を書き込み再提出した。

クラスメイトは呆気にとられていたが、むしろ私は、説得力のある言葉で、私のような悪童を納得させてしまうその人物を無条件で尊敬してしまった。**彼の名こそ東郷先生。**お察しの通り『ゴルゴ13』のデューク東郷という名は、その先生から頂戴したものだ。

以来、東郷先生だけは別格扱いで、素直にその教えに従った。私がそうするのだから、校内で東郷先生にタテをつく者はいなかった。尊敬の念をもって接すれば、相手も胸襟を開いて、何でも意見してくれた。

・筆が進まず落ち込んでいた時に、やる気を湧かせてくれた言葉

ストーリーは、リアリティーに

富んだものが出来上がるのだが、絵がそれにそぐわない。ディズニー調や乙女チック調など、あれこれ試してみても、振り出しに戻るという繰り返し。劇画工房の仲間たちは、「斉藤は器用だな」と、私の悩みも知らず驚いていたそうだが……。

世の中とは皮肉なもので、もがけばもがくほど暗い闇に飲み込まれていく私のところに注目が殺到した。悪いことに、当時は原稿料が先払い。スランプとはいえ、舞い込む仕事を断れるほどに偉くもなく、破れかぶれで仕事を引き受けてしまう。当然、いつまでも作品は仕上がらず、振り込まれた原稿料は、そのまま借金となり膨らんだ。

しかも、いつまで経っても描こうとしない私の態度に、編集担当者は、原稿料が安いから描かないのではと勝手に思い込み、一枚四百五十円を千円にアップ。大卒サラリーマンが月給一万円に満たない相場を考えれば、破格にもほどがある。それで仕事がこなせば言うことはないのだが、原稿料アップがまた精神的負担となり、筆が進まず、気分は重くなるばかり。まさに**スパイラル式に落ち込んでいった。**

その間に一筋の光を与えてくれたのが、尊敬する先輩、工藤いちろうさんだった。劇画仲間宅で偶然に出会ったのだが、その工藤さんから、「斉藤君はこの仕事をするために生まれてきたような人間だな」との言葉を頂戴したのだ。**その一言が、私にまとわりつく黒い塊を一気に砕いてくれた。**自分のことを高く評して、期待してくれる先輩を前に、うだうだと悩んでなんかいられない。よし、先輩の描く斉藤像を汚すことなく、信じるままに描こうという力強い思いがふつふつと湧いてきた。

その日を境に見違えるほどに精力的に仕事に取り組んだ。描き進めていく中で、色々なものが解け始め、何とか強いタッチが生まれてきたような気がした。それが、『台風五郎』である。昭和三十二年の作品だから、一年近くのスランプだったことになる。この作品が、『ゴルゴ13』、そして『無用ノ介』誕生につながったといってもいい。どちらも強い線が描けなければ誕生しなかった作品であることに間違いはない。工藤先輩に感謝すると同時に、さらに、その技を授けてくれたスランプにも礼を言うべきだろう。

・『ゴルゴ13』『無用ノ介』の由来

主人公の名前。これは人様とも同じで、名前がその性格に大きく影響する。

極端な話、名がついたところでキャラクターの性格は確定すると言ってもいい。その好例が、『**ゴルゴ13**』である。「ゴルゴ」とは、キリストが十字架にかけられたゴルゴダの丘で、「13」はキリストの最後の晩餐で十三番目の席にいたユダにまつわる数字だ。そこからイメージを膨らませ、あのキャラクターは出来上がった。

同様に『無用ノ介』も、その名が示す通り、親が無用の子として名付けたその名にかぶさり、あのキャラクターになった。実は、名付け親はさいとう・プロダクションの社長を務めていた兄なのだが、スタッフが名づけに口角泡を飛ばしていた時に、ふと「**情け無用ノ介**」と眩いたのが、そのまま採用され、あのアウトロー像が出来上がった。

・いかにも現実でありそうな話をアレンジする

これだけ描いてきてもネタに困ったという覚えは一度たりともない。そもそも物語というのは、シェイクスピアが書き尽くしてしまったと私は思っている。それだけに余計なことには手を出さない。我々は単にパターン化され尽くした物語にどう味付けし、枝葉を付けるか、それだけを考えて作業を進めれば事足りるのだ。つまり、アレンジだ。

...

脚本担当と私の仕事は、そのいかにも現実でありそうな話をアレンジすることだ。ゴルゴの場合は、この「いかにもありそうな話」というのが重要なファクターになる。奇想天外なストーリーでありながら、現実にあっても不思議はない話であることが作品にリアリティーを与えているのだ。

・幸せとは

人はとかく「幸せとは何だろうか」と考え、悩む。ある人は、いい家に住み、豪華な食事を楽しみ、一年に何度も海外旅行のできるような、誰もが羨ましがるとも身分になるのが一番の幸せというかも知れない。その一方で、お金や物に恵まれなくとも愛する者に愛される人生こそが恵み多き幸せという人もいる。

とりわけ、後者などはきれいな話に聞こえるが、残念ながら、どちらも他人本位の幸福感でしかなく、いずれは綻んでしまう。たとえば、贅沢な生活を手に入れたとしよう。だが、その時点でそれを羨ましがるとは生活レベルが違ってしまい、むしろ周りで眼につくのは、自分より贅沢三昧に生きる人ということになるのが道理だろう。つまり、昇っても昇ってもきりがなく、半永久的に幸福感を得られないということになる。

一方の愛に満ちた生活を望む人も、とどのつまり身勝手な愛の形がまず有りきというケースが多く、いずれ愛の危うさに翻弄され、ついには自分がこれだけ愛しているのだから、その分だけ愛してほしいという身勝手この上ないことを言い出したりする。

そもそも、無償の愛などというものは親が子どもに対する本能の愛以外には有得ない。それを赤の他人に求めるのはお門違いというものだ。人生の究極の目的とも言える幸福になるためには、ちょいとばかり考え方を変えなければならないだろう。

例えば、あるコーヒーを飲んで、美味いと満足するか、またはもっとおいしいコーヒーがあるのではないかと考えるかによって、その人の幸福感は違ってくる。ここにヒントが隠されている。幸福になるためにはそのコーヒーで満足できればいいのである。そうやってしまうと、いかにも幸福とはあきらめのように聞こえるかも知れないが、あきらめには決まって不満がつきまとうのに対して、そのコーヒーを心底おいしいと思えば不満はないことになる。

それは、コーヒーなんていろんなところで飲むものだから、目の前に置かれたコーヒーよりずっとおいしいものを飲んだことがあるかも知れない。しかし、その味は良き思い出として切り離し、今あるコーヒーの美味さを追求したほうがいい。コーヒー豆の挽き方を工夫するというのもあるし、水を替えても味わいは深くなる。たとえ、それが叶わなくても、カップにこだわる、好きな音楽を聴きながらいい本を読む、はたまた、楽しかった出来事を思い出しながら飲むと、ぐっとおいしくなる。そんな時はきっと幸福感に浸っているものだ。精神的にも肉体的にも心地良さを感じるか否かで幸福かどうかが決まる、そう思えないだろうか。

なんとも簡単なことであるが、それを実践するためには自分自身の価値観をもつことが必要になる。テレビや本、雑誌、人の考えに左右されない自分だけの価値観がなければ、いつまでたっても幸福を味わうことはできやしない。どっちの水が甘いのかばかりに気を取られていては、ホントの味がわからなくなってしまう。

・他人の価値観を全く気にしない

私は私なりに楽しむために、他人の価値観を全く気にしない。気にしないというより、気にならない。だから、ライバル心をメラメラ燃やしたなんて相手もいなければ、自分の足を掬うのではないかと若手に怯えたこともない。それぞれが別個であり、違う脳ミソを持っているのだから、そのことを考えないようにしている。もちろん、才能ある人はたくさんいる。しかし、それが私に影響することはない。

...

やはり、自分自身の価値観で獲得したものに囲まれているのが一番心地よい。権威や権力とは無縁のところを置き、自分自身に忠実に生きている私は、実に気楽に、そして快適に人生を謳歌している。